

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1518 号

Reappraising the portoenterostomy procedure according to sound physiologic/anatomic principles enhances postoperative jaundice clearance in biliary atresia

(胆道閉鎖症における葛西原法肝門部空腸吻合術と拡大肝門部空腸吻合術の比較検討)

中村 弘樹 (なかむら ひろき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

胆道閉鎖症に対する代表的術式の一つとされている葛西手術 (肝門部空腸吻合術) はより良い治療成績を得るために多くの小児外科医によって modify (変更) されてきた。その結果、現在では遺残胆管をやや深く広く切離し、肝門部切離面を大きくした後に、吻合をより広く行う拡大肝門部空腸吻合術が多く施設で行われている。しかしながら葛西先生自身が行う葛西手術の術中ビデオを見返すと、遺残胆管の切離は浅く、吻合は狭く、2 時及び 10 時方向の左右の微細胆管を損傷しないよう吻合部の運針は浅い。当院では、更なる術後成績向上のため従来の葛西手術に近づけるように遺残胆管を浅く切離し、微細胆管を損傷しないように浅い運針とする吻合方法に変更した (以後、葛西原法肝門部空腸吻合術)。今回、当院における葛西原法肝門部空腸吻合術と拡大肝門部空腸吻合術における術後短期成績を比較検討した。対象は 2005 年から 2011 年の 24 例。13 例が拡大肝門部空腸吻合術、11 例が葛西原法肝門部空腸吻合術。術時体重、T-bil、術時日令、減黄までに必要とした全ステロイド投与量、黄疸消失率 (T-bil < 1.2mg/dl)、黄疸消失までの期間、肝移植率を比較した。平均フォローアップ期間は拡大肝門部空腸吻合術で 59 カ月、葛西原法肝門部空腸吻合術で 16 カ月であった。比較は、葛西原法肝門部空腸吻合術の平均フォローアップ期間である 16 カ月の時点で行った。術後管理は両群とも同一のプロトコールを用いた。統計処理には student T-test および χ^2 二乗検定を使用した。

全ステロイド投与量は葛西原法肝門部空腸吻合術が 52.2 ± 32.5 mg/kg であり拡大肝門部空腸吻合術の 73.5 ± 22.6 mg/kg に比べて低量であったが有意差を認めなかった ($p=0.7$)。黄疸消失率は、葛西原法肝門部空腸吻合術が 90.9% であり、拡大肝門部空腸吻合術の 46.2% に比べ有意に高かった ($p=0.02$)。肝移植率は葛西原法肝門部空腸吻合術が 9.1% であり、拡大肝門部空腸吻合術の 69.2% に比べ有意に低かった ($p=0.003$)。自己肝で黄疸を認めないものは、葛西原法肝門部空腸吻合術が 72.7% であり、拡大肝門部空腸吻合術の 30.8% に比べ有意に高かった ($p=0.04$)。その他の因子 (黄疸消失までの期間など) に有意差は認めなかった。

葛西原法肝門部空腸吻合術は拡大肝門部空腸吻合術に比べ、短期予後において良好な術後成績をもたらすと考えられた。